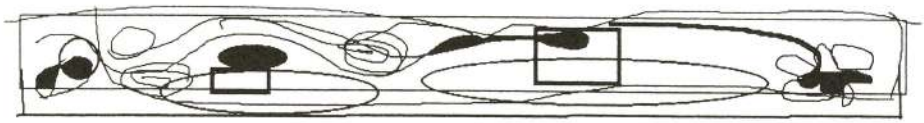
村野次郎創刊

香蘭

2024年（令和６年）１月号

第 101 巻　　第 1 号　　通巻 1117 号

二〇二四年（令和六年）一月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇一巻第一号



香　　蘭

2024年（令和６年）１月号
第101巻　第１号　通巻1117号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（101）……中村陽子…表二
招待作品　奇数月連載②ドネツクのデブ猫……加藤英彦…2
作品
一……4
二……24
三……33
推薦香蘭集……40
香蘭集……41
社告　昇格者発表……15
香蘭基金の御礼……16
作品一　十首選（十一月号）丸山三枝子選……18
作品二・三　十首選（十一月号）渡辺礼比子選……20
一頁公論（32）もう一度訪ねたい場所―奈良県宇陀市・室生寺……市川義和…17
村野次郎への旅（166）……千々和久幸…22
「香蘭」とともに（3）男に負けてはならない……鈴木桂子…30
続・酔風船（1）前口上―本文を越える批評に……千々和久幸…31
私の読む現代短歌（23）「現実の詩化」を志向した高安国世……田中あさひ…44
エッセイ・自由研究　歌を詠む時の私の時空……中村かよ子…46
焦点（十一月号）家族及び友を詠う……飯島智恵子…48
作品評（十一月号）作品一……石井雅子…50
作品二……平川良枝…52
作品三……庄司健造…54
香蘭集……高畠憲子…56
七首抄（十一月号）……八木橋・有馬・関口（洋）・大塚…58
耳言あれこれ（26）オノマトペについて……田中あさひ…59
緑地帯……青山（侑）・朝香・坂井・生田…60
明宝研究会第一四四回　十月例会　大伴坂上郎女の作品……渡辺礼比子…64
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……72
歌会及び会合・会員消息・他……77
編集後記・新宿日記……82・表三
表紙絵……山口　蓬春「桃」　目次・緑地帯カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（101）

師の遠く指さしし屋根川甚と知るのみにして年さかりたり

『村野次郎歌集』

中村陽子

この作品は1968（昭和43）年、村野先生七十四歳の時の作品で、小題「紫烟草舎のあと」八首中、五首目に置かれている。

北原白秋は1916（大正5）年から一年間、私の地元の東京・江戸川区小岩に紫烟草舎と名付けて居を構えていましたが、村野先生（当時二十二歳）はここを何度も訪れて、師である白秋と共に散歩をしています。

その江戸川沿いに川魚料理の名店「川甚（かわじん）」がありました。この歌は濃密だった頃の師との思い出を懐かしんで詠まれたと思います。結句の「さかり」を漢字で書くと「離り」で「年月とともに遠ざかっていった」と解釈しました。

私は家族とこのお店に何度も訪れており、思い出が詰まったお店でしたが、コロナ禍の時に閉店してしまいました。

村野先生は訪れないままのお店だったようですが、「川甚」を通して、時を隔てて先生と繋がっているようで嬉しくもあり、感慨深い一首です。

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』41頁、『村野次郎三百首』95頁に掲載）

四選者の作品

先　生　　平塚　千々和　久幸

白黒をはっきりさせて上を向くきみを見ており危ぶみながら
負けて勝つことも処世の一つにてきみの負けっぷりのよさを嘉する
下田まで先に行くとうそれからの詳細はなしきみのメールは
海上に鶸色の月出できたり観月歌会終えて帰るに
一日の休止符として通いたる居酒屋「たぬき」突如店閉ず
忠告は有り難けれど死ぬための手続きなどはまだ先のこと
先生に責任は無か分かったよお前も九州か世界は狭いね
亡き妻ときみの妻とが談笑をする夢の中ほのぼのと居り

レモンの月　　横浜　渡辺　礼比子

暮れ方の坂を下れば対岸の君住む町の灯りが潤む
くたびれてのぼり来れる坂の上の我が家の隅に彼岸花咲く
丘の上の更地となりし一画に海見て戦ぐ背高泡立草
ゆきずりに黒き揚羽が囁けり　あなたのままでいいのよ今日は
小さなるミスを引き摺る秋の夜の空にレモンの月が傾く
表札に「平等」とある邸宅の門を出でくるヤンキーにいさん
打ち明けてほっとしましたと君言えり　役に立てるはうれしきことよ
むかしわが塗り絵、写し絵、紙せっけん買いし玉屋はローソンとなる

十月・薪能　　鎌倉　高畠　憲子

長月のながき蟬声すでに止みこほろぎ集く鎌倉宮に
背景は十月の森　法螺貝の音いんいんと吸はれゆきたり
平成の始まりに観し薪能　むかしはきのふ　けふはむかしに
前席の昔のわれよ振り向くな三十余年はぐらりと過ぎぬ
あかあかとかがり火に照る羽虫あり大塔宮の魂かとぞ見る
四本の竹が囲へる舞台なり人がめぐれば時間もめぐる
ひと巡り「そろりそろりと参らうぞ」ぐるりと行かば昔は今に
山迫る舞台にからからひびきけり詐欺師萬斎の高笑ふ声

夢の中の夢　　我孫子　丸山　三枝子

思うことしかできなくて限界を越える痛みに臥すきみ思う
白萩のかたえにみやぎの萩咲きて五輪の塔はうらぶれて立つ
居るはずのなき道連れの気配して下りゆくなり暗闇坂を
猛烈な目眩に見舞われ大切の今日の約束果たせず暮れぬ
朝よりの目眩に臥している我に動悸して来る眠れぬ夜は
罰が当たると大井田さんが言ったけど何のことだか思い出せない
逃げてゆく雲追いかけてゆく夢を何度も見てはすぐに忘れる
追いかけてゆく空の雲いつしかに夢のなかなる夢に変われる

加藤　英彦

ドネツクのデブ猫

熱き湯に麺を放てば静まりてのちまた鍋のふちから滾る
憎しみは浄められたか拳かたく握れる朝を沛然と雨
りんりんと忿りの束を解き放て敗兆いずれに濃く戦ぐとも
あれは鳥ならず旋回するくらきドローンの影か空の汀に
銃声はにぶくひびけり臨月の姉の下腹が茜にそまる
　兵站を、兵站を叩け……
背嚢ゆこぼれる水、肉ドネツクの夜闇をくぐり来し太き脚
天をあおぐ発射筒より閃光は疾(はし)れりとおくあがる火ばしら
視(み)えざれば草むらわけて散開す撃たれるためのいのちの軽さ
これも制圧のかたちか地下壕に食べ残されし缶詰めが冷ゆ
謀りごとなんて筒抜けこれの世に幾千のアノニマス※たちが微笑む

※匿名のハッカー集団

「ドネツクのデブ猫」が静かな話題を呼んでいる。ドネツク州は二〇二二年にロシアが一方的に併合したウクライナ4州のひとつである。ドネツクのデブ猫は、そのロシア軍の野外炊事車を次々と奪取して食糧の補給を断とうとするウクライナ工作員のコードネームだ。これは漫画同人誌に登場する架空の工作員なのだが、わたしはどこか愉快であった。同じく話題となった実在の凄腕パイロット「キエフの幽霊」よりも、夜闇に紛れて敵の食糧をかっ攫う大胆かつコソ泥的な庶民性にどことなく親しみを覚えたのだ。

しかし、現実に目を転じると昨年二月以降のロシアによるウクライナ侵攻は凄惨を極めた。ドネツク州の港湾都市マリウポリに降る白リン弾やキーウの閑静な街ブチャで行われた蛮行をわたしは決して許さないが、一方で与えられた環境によって人間は如何ようにも残虐になれる生きものであると人類史は教えてくれる。そうした狂気の奔流からわたしはどこまで自由であり得るだろう。

もし彼が裏切者であったら、わたしは実の父親であっても迷わず彼を殺すだろうと平然と語ったA・アイヒマンを思い出す。すべての情報を遮断され、国家的なプロパガンダの海に産声をあげて一切の思考を停止したまま成長したなら、あの「凡庸なる悪」はわたしの内部にも芽生えたろうか。

最初の砲撃から数日で攻略できると踏んだウクライナ侵攻は思うに任せず、六月以降の反転攻勢によって全き守勢に回ったロシアが今またドネツク州の完全制圧にむけて攻勢を強めている。その攻防は少しでも先に動いたほうが息の根を止められるような緊迫した戦況の連続だ。アウディイウカのボタ山を占拠したロシア軍は、いま逆にウクライナの兵站をいつでも叩ける視界を獲得したらしい。

軍事的な合理性と政治的な思惑とはときに相反し、そこに敵を攪乱する偽情報が幾重にも張られるとわたしなどはもう何がなにやら分からなくなる。それでも、ロシアを絶対に勝たせてはならないと思うのはなぜだろう。軍事にも政治にも疎いわたしは、気に入らなければ殴ってもよいとする力の論理や、どれほど多くの市民を虐殺しても勝てばよいのだという精神の劣度に生理的な嫌悪を覚えるからだろうか。事態はドネツクのデブ猫ほど単純ではない……どうもそれだけは確かだ。

作品一　十首選

（十一月号作品から）　　丸山　三枝子　選

・新盆会の読経聴きいる本当はオレよりおまえが聴く筈だった

千々和久幸

タイトル「盂蘭盆会」の連作八首の三首目に置かれている。明けて一昨年十一月に逝去された奥さまの新盆供養での感慨からは、順序が逆でけしからん、との悲しみの声が三句以下の独白のような口語脈のフレーズに籠められ哀切である。連作五首目の、〈一人（いちにん）を彼岸へ送るに相応の手続きあるを知りて儚む〉の、淡々とした物言いからは、法事という仏教のしきたりへの虚しさと、それとは裏腹の心の安らぎのごとき思いが窺え、共感を誘われる。

・過ぎしことよみがへらせて夜の空に遠き花火が音なくあがる

相川　公子

この二年ほどは、コロナ禍で近隣の花火大会が見られなかった地域は多くあっただろう。久しぶりの空を彩る今年の花火を、作者は眼で愉しんでいる。音を伴わない花火は郷愁を呼び覚ますものがある。「遠花火」は秋の季語だが、「音なくあがる」花火の情趣に惹かれた。作者の過去の物語がさまざまに想像され、眼前の華やかな花火の醍醐味に勝る遠花火の音が、読者の詩心を掴んで離さない。

・未だなほ半透明のかなしみを畳むみたいに折傘たたむ

石井　雅子

「半透明のかなしみ」とは、どんな「かなしみ」だろうか。伴侶を失ったかなしみが、まだうっすらと残っているようにも思える。「折傘」だから、雨が降るとその辺に出される、あのビニールの透明傘ではない。「折傘」は作者の心に兆す「半透明のかなしみ」の暗喩と読んでみた。読者としては「かなしみ」の実態が知りたくなってくる。下句は、〈抱えて我は折傘たたむ〉も有りかなと思ったが如何だろう。

・夏こそは腹冷やすなが口癖の母の声して腹巻きを出す

市川　義和

持病の腰痛が八年ぶりに再発して、脊柱管狭窄症の宣告を受けた作者は、嘗ての「夏こそは腹冷やすな」の母の口ぐせを思い出し腹巻きを出してきて着用した。口ぐせは誰にでもあるが、何かにつけて思い出すのは、「母の口ぐせ」なのだろう。無条件で納得される思考回路である。この「腹巻き」は母からの贈りものかも知れない。今号の、「腰痛再発」連作の五首目には、〈十歳の夏の絵日記たらちねの母がだいじに残しくれたる〉の歌もあり、正に母の恩は海より深いのである。

・口元へ粥をはこべばびよびよとむすめは小鳥の雛の真似する

伊藤美恵子

癌を病む病床の娘さんは、〈たのしかったよ充分生きた〉と、亡き父が家族に遺した言葉をそのまま作者に告げて、母を思いやる優しい人なのだ。掲出歌では、粥を食べさせてくれる母を悲しませまい

として、ぴよぴよと小鳥の真似をする。そんな健気な娘さんとの時間は尽きようとしている。連作「哀歌」の七首に、読者は瞑目するばかりである。〈辛くてもう頑張れないよごめんねとむすめは言えりわれはうなずく〉の歌からは、やり切れない思いをきちんと一首に表現する歌人、伊藤美恵子が立ち上がり絶句する。

・キミの目の揺らぎがくっきり見えちゃって笑ってないのに今更気づく

伊藤　康子

白内障の手術を受けた作者は、蘇った視力で明るい日々を過ごしている。そんななか、見えなくてもいいものまで見えてくる日常に焦点を当てて詠んだこの歌に読者はニンマリとさせられる。これが現実なのだ。片仮名書きの「キミ」なる人と作者との関係が気になる。気にならせておいて読者を立ち止まらせる魂胆か。「手術」一連七首の六首目に配されたこのウィットの歌が面白い。白内障の手術は私も受けたが、生まれ替わった自分への嬉しい驚きなのだ。

・庭に咲く小海老草三本花束にしてたずねくる幸子さんが

長野　道子

「幸子さん」は作者の近所に住む、さざなみ支部歌会のメンバーの三澤幸子さんであろう。草花が好きで珍しい草花を育てている。「小海老草」は、朱色の花の形が海老の尾のように曲がっているユニークな花だ。三澤さんは、道子さんに会うと歌を続ける元気が出て来る、と言う。香蘭の仲間同士の交歓が偲ばれるこの歌に、読者も励まされる。次の歌の、〈ふふふっと恋におちるように散りいたる花形くずさぬ小海老草が〉のユニークな比喩にも注目した。

・集ひゐるよさこい節の踊り子ら吾こそ主役の異様な熱気

西野美智代

土佐の民謡「よさこい節」は広辞苑によると、五台山竹林寺脇坊の僧と、鋳掛屋（いかけや）の娘との恋愛事件を歌って、元禄年間の頃に流行り出したらしい。今や日本の伝統芸能と言っても過言ではないだろう。作者は映像で見ているのかも知れない。踊り子の一人一人が、踊っている自分自身に酔っているように見えたのだろう。それを「吾こそ主役の異様な熱気」と表現した下句に得心した。人はいつだって主役になりたいのだから。

・雨のあと陽のさしくれば自らを恋うるがごとく山鳩の鳴く

宮原　迪恵

そう言えば雨降るなかを鳴いている鳥の声は聞いたことがない気がする。「山鳩」のくぐもるような鳴き声には哀感をそそるものがある。四季おりおりの身巡りの自然をさらりと掬い、叙景の歌に心象を加味して作者独自の情趣に仕上げる。山鳩の鳴き声は作者自身の心の声のようにも思われる。

・評がしにくい、といふも評のうちはからずも今日の収穫として

髙畠　憲子

代表と市川さんの参加された鎌倉三支部合同歌会は、盛会裡の内に推移し二次会も愉しかったらしい。その連作八首中のこの歌に惹きつけられた。「評がしにくい」のは、あまりにも分かりやすい歌だからか、分かりにくいけれども、分かりにくさが歌の妙味になっているのか。「収穫として」、だからたぶん、評のしにくい歌の方が、より味わい深い、ということなのだろう。〈歌の会お開きとなり無礼講　ここは鎌倉居酒屋の「わん」〉も味わい深い。

作品二、三　十首選

（十一月号作品から）　　渡辺　礼比子　選

・ヤバ、エグと話すスーツの就活生も「御社」なんて言うんだきっと

小笹岐美子

「ヤバい」は本来「不都合である。危険である」という意味だが、今は若者言葉として、正反対の意味の「最高！とてもいい」等という賛辞にも使われるようになった。また「えげらっぽい」という意味の「えぐい」も同様にスラングでは「スゴい」という誉め言葉として多用されている。さらにどちらも「ヤバい→ヤバ」「エグい→エグ」のように、何かといえば言葉を短縮する若者文化の象徴的な表現である。ところが当然のことながら、彼らも就職面接等の場面では人が変わったように、型通りの言葉遣いをするようになる。一見そんな若者達を揶揄しているようでもあるが、今後は組織の歯車となっていく彼らの行く末を憐れんでいる歌のようにも読め、結句の口語に作者のやりきれない思いが覗く。生きている言葉に敏感な作者と見た。

・この夏に逝きたるひとも飲み会の肴となりて場になじみおり

庄司　健造

親しい仲間が集まって、恒例の飲み会をするが、先頃仲間を一人喪い、やはりその寂しさは拭えない。しかしここでは、亡き人の思い出を語ることで彼の生前の姿を宴の場に蘇えらせている。その欠点やしくじりのエピソードなども　話題になったことだろう。そんな風に仲間が彼を思い続け、話題にしている限り、死者はそこに前と同じように存在しているのではないか。結句の「場になじみおり」という句によって、亡き友を思う作者の温かい人間性が覗く。

・人間の欲望の果てを問はるるかこの夏をいかに語り継ぐべし

杉山伊都子

この夏を思い返すと暗澹たる思いにならざるを得ない。コロナは五類になったが終息したといえる状態ではなく、私たちの心は常に休まることがない。テレビのニュースを見れば、ロシアウクライナ戦争の目を覆うばかりの惨状が映しだされる。さらには、世界的な猛暑による健康被害や農作物への影響は計り知れない。これも温暖化とかかわりがあるとすれば、結局人間自身のあり方が厳しく問われているということだ。欲望に限りのない人間の愚かさをかえりみない限り、いつか、取返しのつかないことになるのではないかという、作者の深い憂慮の伝わる時事詠である。

・あの角をまがり終はるまで見送らう夏といふ名の四季の旅人

田中あさひ

この一首に具象的な表現はいっさい使われていない。夏は擬人化されていて、「旅人」として作者に惜しまれながら、見送られている。夏がどんな姿をしているかはすべて読者の想像に委ねられている。ある人にとっては、輝かな雲や光であるかもしれないし、またある人にとってはセミの声や夏の田園、或いは一夏の恋であったかもしれない。角を曲がっていなくなってしまう夏の後ろ姿は慕わし

い。こんなイマジネーション豊かな歌を詠んでみたいものだ。

・この猛暑いんげん豆の花咲くも実はならぬなり　入道雲よ

中井　房江

野菜作りをしている人にとっては、この夏の猛暑はどうにも手に負えぬものであったろう。インゲンの白い蝶型の花が咲けば、そこに実がなるだろうと信じて楽しみにしていた。しかし、ことしは花が咲いただけで、猛暑のために実りはなかった。四句までは事実を述べて、結句の前一字あけで「入道雲よ」とただひとこと。空を仰いで作者が嘆いている場面を想像した。この結句一語で読者に読みを任せた構成は心憎いうまさである。

・波際で大きく伸びするビキニの子色白の肌に光の弾む

山下　紘正

作者は海辺を散策しているところ。偶然波打ち際に立っている水着姿の美しい少女に出会った。その輝くような白い肌、しなやかな肢体に魅せられたが、声をかけるというわけではない。目の保養でよしとして一首をまとめたのであろう。「大きく伸びする」というフレーズによって、健康的なエロティシズムの眩しい作品となった。

・農業をやっていますというよりも雑草あまたと戦っている

柏原　貞雄

それだけ今年の夏の暑さで草が猛々しく生い茂ったということであろう。猛暑日の炎天下での作業は過酷なものであっただろうし、作物の出来も心配だ。にもかかわらず、先ず雑草を刈り取らねば農作業は始められない。もう、うんざり。しかしそこのところをこの作者はユーモアに転化してパワーにしている。エールを送りたい歌。

・お尻からひょいとスマホを取り出して見ている人を追い越してゆく

川久保百子

作者としてはあれこれいいたいことはあるだろうが、簡素な詠みぶりで風刺を利かせた作品。上句に何ともいえないリアリティとユーモアがある。前をゆく人が歩きスマホをするのか、止まって道を塞ぐのか、どちらにしてもそんな人に関わっている隙はない。自分も色々と忙しいから、さっさと大股で追い越していくのみである。

・ウクライナ戦に戻る負傷兵身捨つるほどの祖国あるらし

小城　勝相

負傷していても、お達しがあれば、戦線に戻っていかなければならない兵士達。何と酷いことだろう。作者は彼らのことを思う度に怒りを抑えることができない。結句の「身捨つるほどの祖国あるらし」は寺山修司の「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」のパロディである。逆説的な表現で、そんなものなどあるはずがないだろう、と鋭く読者に問うているのだ。

・見慣れたる町も日盛り　わが影につまづきさうな錯覚おぼゆ

澤田久美子

初句「見慣れたる町」で自分の立ち位置を提示しておいて、下句では、さりげなく非現実の世界へと読者を導こうとしている。自分の影に躓くなどということはありえないのに、何か特別な力が働いて影の世界に操られているような不思議な魅力のある歌だ。ただ、結句で「錯覚おぼゆ」と言ってしまったのはどうだろう。もう一つ詩の世界へ飛びきれず、足踏みをしているような印象になり、その点が惜しいと思った。

村野次郎への旅（165）

大正期の「香蘭」（二十六）

千々和　久幸

引き続き「香蘭」第四巻第十二號（大正十五年十二月號、1926年）に掲載された歌壇合評を読もう。今月の評者は杉浦翠子、今井嘉雄、清原齊、村野次郎である。

アララギ

暁に皆起きいで、口すゝぎこぼれし水は庭ながれたり

山院の桶にたゝへし眞清水を口にふくめば齒に沁みにけり　繕城哀草果

（翠子）（一）は「こぼれし水は庭ながれたり」が作者の興味であつたのでせうが、その感情がこれだけの表現では物足りないと思ひます、口すぐ處の位置も訊問したくなるし、暁にと云つたところでそれがこの一首に必要を醸してゐない。「庭ながれたり」は庭にとか庭をとかの助辭を抜きにしても意味は判りませうが私にはやはり氣になります、橋本政一さんの歌にも行水の水が草の中に流れてゆくなどゝいふものもあつたし、かう云ふ處を捉へる歌ならばもつと描寫を鮮明にしなければやはり平凡歌になつて了ひます。すこし記述に留まつた形があります。

（二）これも歌に捕はれてゐます。冷たい山の水が齒に沁みたといふのは大正十年のあなたの恩師の歌にもあります。あつたことを再び歌つてはならないことはありませんが、何とかどこかで形あるいは色を變へなければ先人の追随となつてやはり損です。作者の頭にいつかはいりこんだか知れない先輩の匂ひが、同じ環境に巡り合せるとき涌然と蘇生してくるのです。それを本當に私たちは怖れたいと思ひます。藝術は獨自のものでなければならないことは申すまでもなく個性の尊重など、いふことはみなそこを云ふのでせう。

（嘉雄）（一）の歌いい境地だ。だが表現上に於て、どうも難が有る。焦點は無論下句に有るのだが、上句の表現が強すぎた爲めに何となく混雑してゐる。僕なら第四句を「こぼせし」としたい處だ。

（二）の歌は境地に於て（一）の歌に？（脱字）る。だが如何にも素直に衒氣なく歌つてゐるのに心ひかれる。

日光

いにしへやかゝる山路に行きかねて寝にけむ人はころされにけり

雨霧のふか山なかに息づきて寝るすべなさを言ひにけらしも　釋　迢空

（翠子）釋先生のお歌を私が批評するなどとは僭越の至ですが、こゝばかりを逃げると云はゞそれは私の純心に背くわけでもあり雑誌の經営上この失禮を御諒察下さい。

（一）のお歌は尊敬します。「いにしへや」といつて「ころされにけり」の結句など立派な表現だと思ひます。一首のうちにやの字がある時中々その構圖が難しくなるものですがこの一首の重厚な調子には流石と敬服致しました。

（二）は、まだ不足があると思ひます。それは主觀に弛みがあります。「寝るすべなさを云ひ

にけらしも」が先生のお作としては稍妥協の態です。然し短歌といふものを藉りて表現する主觀はこの邊で我慢しなければならないのかも知れません。私達は進めば進むほどに感情が複雑になり觀察も緻密になりますが、短歌ではそれが中々表現しにくいのを此頃泌々と感じて、煩悶をしている際ですから、このお歌に就いて主觀に弛みがあると申すのも察して下さい。即ち私の煩悶は、短歌に於ける主觀の表現といふものは、この程度で可不可の問題なのですから失禮。

（嘉雄）二首共に氏の個性のよく出た歌だ。斯う云ふ、へんに深遠な或る妖氣を感じさせる歌は氏の獨壇場とも云へやう。だが（一）の歌の第二句の「かゝる」と云ふのをもつと率直に「此の」と云ひ切つては不可いだらうか。

吾妹

窓の外は草まだ青き武蔵野の月夜なりけりこほろぎのこゑ

月影に穂は穂となびく明るさやくだつ夜ながら窓はさゝぬかも　楠田　敏郎

（齊）（一）「窓の外は」と出て三句「武蔵野の」と流しつぱなしにして下句につづいてあるのが氣になる。下句は陳套。

（二）誰れでもやりさうなところを常識的な表現で而も歌人らしく「くだつ夜ながら窓はさゝぬかも」と氣どつたところに、作者の甘さが見えて面白い。兎に角氏の歌は、聡體に纏つてはゐるのであるが、觀照の低い爲か感動の潜在を認むることが出來ないのである。

（次郎）（一）一首全體から見ると上句は概念であつて實感味の乏しいものと思ふ。下句も言葉だけであつて心で歌つてゐるとは見えない。（二）第二句あたり言葉に興味を持ち喜んでゐる様に見えるが、矢張り捉ふべきを捉へてゐる。（一）より優れてゐる所以である。

巻末の「六號雜記」から香蘭の横顔を覗いてみよう。

「思ひ出」と題した樂寛山人の「ユウモア」には次のような歌が引かれている。

あかあかと燈を點けはなち人までば頭のふけのしきりに痒し　村野　次郎

死ぬべきを死なせて心くつろぎぬ歸る畦路の曼珠沙華の花　池上　秋石

この花は何んの花ぞも書きてにも分からぬ花ぞあて、見給へ（自筆の繪葉書にそえて友におくる）　島田　旭彦

風の音に引導の言葉がきこえねば坊主の動く口を見てをり　冬野　木枯

落ちしものこはれざりしらし隣室に拾ひつつ妻はうたをうたへり　同氏

同じく「六號雜記」から村野次郎「腹から出た歌」を引く。

謡曲でも義太夫でも咽喉や口先で奇用にやつたのではまだ、ほんものでないそうである。作歌の態度も之と聊かも變つてはゐない。假令有名な歌人であつても、仲々上手だ、手慣れて隙がないと云ふだけであつてはまだいけない。

十一月號の島田旭彦君の作に

・この花は何んの花ぞも書きてにも分からぬ花ぞあてて見給え

これは自筆の繪葉書に添へて友に送つたものである。一體島田君は歌を指先で造らうとはしない。偽者の飾りをしない。下手なら下手なりに個性が現はれてゐる。この一首も讀んで實によい氣持になる。兎に角腹の底から出て來たと云ふ氣がする。この態度が實にうらやましいのである。